

【平成 29 年度 養成校意見交換会 議事録】

日時：平成 29 年 11 月 18 日

場所：リファレンス駅東ビル貸会議室（T 会議室）

タイムスケジュール

時間	内容
15:00	開会挨拶 公益社団法人福岡県理学療法士会 会長 西浦健蔵氏
15:05	出席者自己紹介 出席者自己紹介
15:20	はじめに 過去の意見交換会の振り返り 抽出された課題確認 & 今年度の目的
15:25	養成校の現状把握 養成校の抱えている課題・問題点の把握を行い情報の共有を行い、養成校・県士会として取り組むべき課題について検討する。
16:00	休憩
16:15	卒前・卒後教育について ◆卒前教育 ①臨床実習前の各養成校の取り組みについて(診療参加型実習を導入による準備) ②臨床実習の質の向上を目的とした情報交換 ・養成校より自由発言 ・「卒前・卒後教育検討委員会」より 卒前教育の検討内容について報告 & 検討 診療参加型実習の導入について ◆卒後教育について ・「卒前・卒後教育検討委員会」より 卒後教育の今後について
	組織力強化について
	・理学療法士会組織力の継続的な強化について
17:30	その他 今後の意見交換会の目的について(方向性)・・・意見交換
17:50	閉会挨拶 公益社団法人福岡県理学療法士会 副会長 永友 靖氏

＜養成校意見交換会参加者＞

《理事・監事》

各部署名		担当理事名	勤務先名
	会長	西浦 健蔵	甘木中央病院
	副会長	永友 靖	夫婦石病院
	事務局長	近藤 直樹	北九州市立総合療育センター
学術局	学術編纂部 理事	佐藤 憲明	九州病院
	学術研修部 理事	宇戸 友樹	専門学校麻生リハビリテーション 大学校
社会局	公益事業推進部 理事	熊谷 謙一	製鉄記念八幡病院
事務局	総務部・財務部 理事	諫武 稔	福岡青洲会病院
	組織部 理事	永野 忍	九州医療スポーツ専門学校
支部局	局長 理事	岩佐 聖彦	久留米大学病院
	北九州支部 理事	山内 康太	製鉄記念八幡病院
	筑後支部 理事	福田 輝和	朝倉医師会介護支援センター
監事		明日 徹	産業医科大学若松病院
		日野 敏明	済生会八幡総合病院

H29 年度 意見交換会参加者名簿

	学校名及び施設名	参加者	役職
1	北九州リハビリテーション学院	河波 恭弘	学科長
2	福岡医療専門学校	山本 拓史	
3	福岡リハビリテーション専門学校	斉藤 和広	学科長
4	麻生リハビリテーション大学校	田中 裕二	副主任
		山下 慶三	リーダー
5	国際医療福祉大学	池田 拓郎	講師
6	福岡天神医療リハビリ専門学校	小倉 信作	学科長
7	九州医療スポーツ専門学校	中林 紘二	学科長補佐
8	福岡和白リハビリテーション学院	野見山 通済	教務部長
9	小倉リハビリテーション学院	藤本 一美	教務部長
10	福岡国際医療福祉学院	宮崎 至恵	学科長
		松崎 秀隆	
11	柳川リハビリテーション学院	横尾 正博	学科長
12	久留米リハビリテーション学院	大坪 健一	学科長
13	九州栄養福祉大学	大峯 三郎	学科長
14	帝京大学	関 誠	教授

[議事録]

1. 開会の挨拶：会長

県内の養成校 15 校中、14 校参加をいただき、感謝している。意見交換会も第 6 回目になり、活発な意見交換ができるようにしたいと思っている。理学療法士の質を改善するためにも今後の将来像を踏まえ、検討していきたい。

2. 過去の意見交換会の振り返り、スケジュールについて

諫武理事より過去の意見交換会の振り返りを実施し、今年度の養成校意見交換会の目標について確認が行われた。

■平成 29 年度養成校意見交換会の内容（昨年 of 検討内容は、議事録参照）

平成 24 年度以降 5 年間卒前・卒後教育の在り方について検討・意見交換会を実施した。

↓

平成 28 年度

- ・養成校の抱えている課題・問題点の把握を行い情報の共有を行い、養成校・県士会として取り組むべき課題について検討する。・・・ハラスメントなど
- ・卒前・卒後教育について
卒前・卒後教育検討委員会の報告および、継続議案である CCS の導入について意見交換を行った。

↓

平成 29 年度は昨年より継続している

- ・養成校の抱えている課題・問題点の把握を行い情報の共有
 - ・卒前・卒後教育検討委員会からの提案および意見交換
- 加えて

- ・県士会組織力の強化に向けての養成校との協力体制の構築について意見交換を行う。

3. 自己紹介

参加者より所属・氏名の紹介

4. 議事

1) 実習関連 ハラスメントについて、現状はいかがか

理事 A：福岡県理学療法士会の会員に対して就業関係を含めアンケートを行った。パワハラ、セクハラ、マタハラについて調査をさせて頂いた。学生に対しての現状調査は行っていないので今後、検討していきたい。臨床の理学療法士の現場ではハラスメントが起きている。

養成校：毎年、臨床実習後にアンケートを実施している。健康面や臨床実習の指導の方法を含めて調査を行っている。この 2、3 年にパワハラの報告があがってきている。特に女性からの報告が多い。嫌味のある言葉を言われた、真剣にフィードバックしてくれない。宴会の場で嫌がらせがあがっている。

養成校：実習の現状を 2 週間に 1 回はメールで報告するようにしている。実習指導者会議においても具体例を挙げてどのようなものがパワハラになるか指導している。同じ施設においてもフィードバックに差が生じている。

養成校：以前よりも報告は減ってきている印象を受ける。最近は CCS を導入して、パワハラの事例は少ないと考える。

養成校：全体的には少なくなってきた。学生の受け方もあると考える。

理事 B：2、3 年前まで SNS でリハビリの実習がブラックであるとの報告を受けたことがある。臨床実習に出て精神的に追い込まれて、退学になるというケースは少ないと考えてよいのか。

養成校：指導者の原因というよりは実習の中で自滅する形でうまくいかない。もともとの問題を抱えている学生は変わらないと考える。

養成校：5 年前より論文を作成している。件数は減少傾向にあり。内容においては言葉の暴力が多い。将来を否定されるということが非常に多いと考える。学生のほとんどが不当待遇を訴えることはない。訴えるほど重要ではないという回答が 6 割。女性のハラスメントを訴える傾向が多い。

養成校：言葉の使い方でバイザーに問題があった事例がある。「自分で実習地を探してこい」と言われた。こちらからお断りした件が2例。重さとしては少なくなっているが件数は多いと感じる。

理事 C：バイザーの経験をしていて、2例今までに経験したことがない事例があった。学生がバイザーを否定する事例があった。学生がハラスメントを利用しているように感じる。バイザーが学生に遠慮しながら発言していることもある。実習毎に学生との密なコンタクトを行っていただきたい。

理事 A：モラルハザードという言葉をご存知であると思うが、日常的に強い言い方や性的な言い方を受けてすぐに対処することが重要であると考えている。周りが感じた時点で対応すべきではないか。

会長：私たち県士会がどのように対応するか。我々が会員に情報提供することも大事ではないかと考える。

2) 学習障害のある学生に対する臨床実習の在り方（指示がはりにくい点など）

養成校：学生自身の問題と受け入れる施設の問題があると考えている。昨年も1名が実習最後に中止になった。専門医の診断を受けて、どのように実習を進めていくか、学生が実習に行っている内科の医師に診てもらい、連携して実習を終えることができた例がある。養成校だけではなく受け入れ側も対応するべきであると考えている。

理事 D：本人自体も発達障害だと自覚していない。過去のエピソードを聞く中でおそらく、臨床側のスタッフは発達障害の学生への対応は慣れていないと考える。たまたま発達障害を診ている臨床現場であったので対応ができています。

養成校：発達障害のある学生を臨床実習に送っていいものか、悩むケースがある。学生の情報をどこまで施設側に伝えるか。判断が困難である。施設側がどの程度理解されているか。うまくいった場合の例ではバイザーが内科の医師に相談を行った。保護者も介入していただいた。

理事 D：事前に情報をもらいたいと考える。学生本人はなぜ、指摘されているかわからない。学生が疲弊してしまうケースにつながるのではないかと考える。重度になると適応障害、うつ、統合失調症になるケースがある。発達障害に対しては情報を発信していただきたい。

3) 臨床実習について、学院としての教育目標や指導方法などを実習指導者会議等で伝えているが、実習施設内で伝達されていないことがあり、困難感を感じている。

恐らく実習施設側からすると養成校側で統一されていないため、混乱や繁雑する原因と受け止められている。

養成校：臨床実習の指導について国会でも問題になっている。養成校側の依頼が養成校毎にばらつきがある。足並みがそろっていないと感じている。多様な要望に現場が応えることが困難ではないかと考える。伝達の問題が特に多い。組織の中で十分伝わっているのか。県士会で手引きをまとめたことは良いことではないかと考える。

理事 C：臨床実習指導者説明会に参加させて頂いている。管理者が臨床実習に対する意識が薄くなっていると考えている。管理者研修会を通して情報を発信できればと考える。

4)

・理学療法士のイメージについて、やりがいのある仕事であることが高校生に十分に伝わっていない

いと思う。

・18歳人口減少、就職率の上昇、私大文系学部や建築系学部の人気の中、看護系以外の資格、就職志向の強い学校は志願者が減ってきている状況です。若い人向けのPT啓発について養成校と県士会で協力し取り組む必要があると思う。

養成校：今年は特に感じている内容である。定員を満たしている養成校もあると聞いているが、我々の養成校では苦戦している。養成校の運営・企画だけでは定員確保は難しいと考える。全国的にも九州ブロックの養成校は苦戦している。若い方に啓発する機会があればと考える。OT・STはさらに深刻である。

養成校：男性が看護学科に来るケースが多くなっている。組織の力を高めるためには広報活動が重要であると考えます。

会長：県民のみなさんへの啓発と理学療法士の仕事を伝えるという点では県士会も検討する必要があると考える。会員としては養成校が多いのではないかという意見もあり。会員を増やすというよりは理学療法士の仕事の情報を発信したい。

副会長：社会局の公益推進部の方でミニバスケや野球を行っている小中学校を周る活動を行っている。アスリートを目指す方に理学療法士を知ってもらおうと働いている。理学療法士の役割がどういうものであるか、低年齢層の方にも啓発できればと考える。

理事E：北九州支部においても中学校に出向いている。今後も検討していきたい。

理事D：提案ではあるが介護予防教室、転倒予防教室などで学校の広報もできないか。ブースの設置や資料の配布を提案できれば良いのではないかと考える。支部や地区が養成校と連携をとればより良いのではないかと考える。

会長：理学療法士のやりがいのチラシは作成できるのではないかと考える。役割を情報提供できる場を作るのはどうか。

理事C：県士会でオープンにできるイベントを養成校からも情報提供することができるのではないかと考える。

理事A：県民向けに広報誌を配布している。各支部での県民向けのイベントで配布をしており、部数に余裕があるため養成校でご利用したい場合は発送することも可能。

5) 就職は年内に決まる学生の数が減少している。

養成校：関西・関東など県外に学生が流出している。一人、1内定を原則としていた。関西の方では何個も内定が決定している学生が存在する現状にある。

理事F：例を挙げると20年近く新卒採用が途切れたことがないが、今年は0であった。採用に関しては厳しくなっている。

養成校：県士会の人数はどうなっているのか。

理事F：確定ではないが現在は5700名、退会は200名。会費未納は600名になっている。年度末には会費未納が半分以下になるのではないかと考える。ここ何年かは会員の伸びが少なくなっている。

理事D：新人は300いない。転入出の影響もあると考える。

理事F：新卒も申し込みはしているが入金していないことが多い。

副会長：求人の動向はどうなのか。

養成校：求人数において福岡県は圧倒的に少ない。病院は減少している傾向にあると考える。

会長：地元志向が強い。人件費を抑える点で、地元の方を選ぶ方が多くなっている。今後は老健への求人が増えるのではないかと考える。

副会長：福岡県自体は減点査定を受けている施設が多いのではないかと考える。査定により求人が減っているため、採用に影響している。

養成校：専願、併願可能という施設もある。今年の傾向であるが、内定式がある施設もでてきている。

6) 専門職大学に関する情報等が何かありましたら教えていただきたい。

養成校：養成校でエントリーするところがあれば

理事 A：厚労省が出してくる基準の方が厳しいのではないか。

7) 臨床実習前の各養成校の取り組みについて

養成校：CCS についてチェックリストを使用して、バイザー会議でのアナウンスを行っている。必ずしも採用してくださいと伝えていない。

理事 E：養成校 C と基本的には同じ。違う点では技術も認知スキルも指導して頂きたい。3年前から認知スキルにおけるループリックを作成している。ガイドラインとして使用して頂きたい。現場に出ないとわからないということもある。ガイドラインがあることで指導しやすいという評価も頂いている。

養成校：現在検証中。

養成校：CCS に関しては来年度を目標に考えている。今年度まで従来と併用しながら。養成校の職員が CCS の勉強を行っている。実習先の先生方と話しができるようにしている。

養成校：ある程度意図が伝わるように記録用紙を作成している。ループリックで点数式にして公平な成績がつけれるようにしている。毎年、ブラッシュアップしていく形にしている。実習後もバイザーを招集し情報共有を行っている。

養成校：1 症例においてはまとめあげて 4 回実施している。情報をできるだけ自分でとる。純粋な CCS とは異なっている。

養成校：4 年目に入っている。レポート指導はいらぬという指導。成績は実習先には依頼しない。症例報告会の資料は養成校で行っている。経験報告書を作成して頂いている。

養成校：現在は従来型。来年度から CCS を取り入れる予定。

養成校：2 月から短期実習が始まる。それから全施設に依頼をして導入予定。

養成校：30 年度のから CCS での導入を考えている。

養成校：施設側にまかせている。

理事 C：CCS でアプローチをしているが、正しいのか判断に迷うことがある。可能であれば養成校からフィードバックして頂きたい。学生から学校で発表があるので見てほしいという依頼がある。

養成校：レポートを作成するしないというわけではない。養成校で解釈が正しいのかどうなのかを患者様を診ていないので指導することができない。レジュメにおいては指導することができるが、思考過程においてはバイザーに指導して頂きたい。

理事 C：できればバイザー会議でお知らせして頂きたい。

養成校：昨年度から症例発表を実施していない。認知スキルを症例報告で確認したいということであったため実施していた経緯がある。日々の臨床でアクティブラーニングしたものを納めていくという形で評価している。

養成校：バイザー会議で伝えているのは学習理論をどのようい指導したらよいか問題であると考え。症例発表会は継続している。意味合いとしてはバイザーについているので、複数回同じ症例と接する機会がある。経験を重視する。成績評価での症例発表ではない。

養成校：CCSの臨床実習の評価をどのように行っているのか。成績をどのようにしているのか。
養成校：症例発表の内容はあまり評価していない。出席とチェックリストの項目と症例発表の期日の3つを評価している。

理事E：疾患によって、チェックできないようなことがあるのではないか。

養成校：本校で上位要項になるのは遅刻をしない、接遇とか。整形だからとか脳血管だからというのは点数に入らない。

養成校：実習の成績の付け方について。学内での演習を1年間かけてしている。OSCEに対して10%、提出物10%自己学習を10%学外の先生方に従来のやり方で50%の従来の点数をつけて行っている。

養成校：事例として。実習地においてCCSで20項目ができなければ合格ができないといわれ、不合格になった学生もあった。誤解をされている施設もある。理解不足もあると考える。施設のスタッフにおいても教育が必要ではないかと考える。

養成校：医学教育における実習に出すためにOSCEとCBTを採用している。

養成校：OSCEは全学年に対して行っている。3年の後期から実習。

会長：学生の接遇能力がトラブルになることがある。事務の実習生によりも弱い部分ではないか。OSCEの中の接遇の試験も実施する必要があるのではないか。

養成校：カリキュラムの中にコミュニケーション能力を養っている。3年になったら評価に特化したOSCEを行っている。

養成校：実習の評価もそうであるが。県士会としてはどういう形で卒業してほしいという思いがあるのか。

理事G：卒前・卒後の中でも議論になった。認知スキルは絶対に必要であるという見解になった。

監事A：目標というところでは、指導者の監督下の元で、うちも新人が入ってきたら指導者がついて行っている。点数がとれるようになったら従来式ではなくて、必ず指導者がついて少しずつ自立していく。今の時代に合う指導を。実習終了後にOSCEを行っている養成校がどのくらいあるのか。共通言語という点について、バイザー会議などの言葉の定義を見直すべきではないか。

8) 臨床実習の質の向上を目的とした情報交換

・養成校より自由意見

理事C：従来型の施設。免許がきたら一人でみる。上層部に訴えても伝わらない。協会として企画している管理者をいかに引き出すか。アンチCCSという方もいる。認識をどのように深めていくのか。

会長：バイザー会議の言葉において今後は変更することが望ましい。研修制度を2日間行ったが。研修制度をしたスタッフが何人いますかなどを聞いて頂きたい。双方で臨床実習を作り上げて頂きたい。

養成校：全国で話があったが臨床実習指導士になるためには2日間必要。県士会としてはどのように考えているのか。退会した人も研修ができるのか。

会長：基本的には会員でなければ研修は受けることができない。

9) 卒後教育について

理事E：養成校を卒業して、研究を行った学生と行わない学生では差があるのではないか。

養成校：グループワークでの卒論を行っている。卒後教育講座を行っている。

養成校：卒業論文を作成している。4月に研究テーマを作成し完成させている。

9) 組織力強化について

理事 F：今年度は新人が 296 名入会。会員は 5700 人。養成校を卒業して入会した会員が養成校毎にデータを出して頂いた。養成校において差がみられているため、今後検討していきたい。

10) 今後の意見交換会の方向性について

理事 H：就職の件で病院が少なくなっているが、実習先は病院が主体となっているが今後は訪問や介護への移行も考えているのか。

養成校：医療関係も変革の中で伸びていく分野はどこか説明を行っている。

閉会の挨拶（永友副会長）

永友副会長

6回目となるが、年々良い内容をなっていると感じている。臨床参加型の指導をできるようになっている。今後も会員に向けて情報を発信していきたい。会員が増えてくると理学療法士の不祥事も増えてきている。県民に対して理学療法士のイメージが悪くならないように対策も考えている。理学療法士の啓発セミナーを開いて開業する、他の仕事を行っている会員が増えている。社会的な問題にもなっているため、教育も含めて対策していきたい。